

崔書勉先生と私 『出会いから十五年』

元拓殖大学副学長 草原 克豪

はじめて崔書勉先生にお目にかかったのは一九九七年八月、「二十一世紀を考える会」という勉強会の夏期セミナーにおいてであった。当時は教科書問題や従軍慰安婦問題などが尾を引いて、日韓関係はまだまだ正常化にはほど遠かった。韓国政府は日本の漫画、映画、音楽などの大衆文化に門戸を閉ざしたままで、両国間の交流も少なかった。そのような時に、崔先生が日韓関係の歴史について講義されたのである。私たちにとっては初めて聞くようなことばかり、というより、日頃あまり考えてもいなかったような視点からの講義であった。思えば自分自身、それまで仕事のうえで外国との接触が多く、外国生活も長かったが、どういいうわけか韓国とだけはまったく縁がなかった。一番近い国なのに自分の頭のなかでは空白地帯であった。崔先生の講義を聴いて、これではいけないと痛感したものである。おそらく他の仲間たちも同じ思いだったに違いない。先生もその心配を察知されたのであろう。その直後に先生の発案で、週末を利用した二泊三日の韓国研修旅行が企画されることになり、十六名の仲間に四名の夫人を加えた二十名が参加した。

わずか三日間とはいえ、この研修旅行は崔先生がすべて企画されただけに中身が濃く、自分にとっては世界観が変わるような貴重な体験であった。初日の歓迎昼食会では、金守漢国会議長が、二十世紀の歴史を振り返りながら日韓関係の重要性を説き、その中で「日韓関係がよくならなければ、それは時代の要請に対する怠慢であり、歴史への背反である」と述べたことに特に深い感銘を受けた。

日本大使館における勉強会では、韓国のある大学が実施した世論調査の結果にショックを受けた。日、米、中、露、北の五カ国の中で日本は、最も親しくすべき国という項目では八%で五位、警戒すべき国では五十七%で一位、嫌いな国では六十五%で一位、信頼できる国では五%で五位、見習うべき国では六十%で一位だったという。嫌いだだけ

ども見習うべき国だなんて、まるで分裂症ではないか。日本に対する大きな誤解があると思われぬ。おそらく韓国政府による反日教育の結果であろう。

韓国の人にはもつと実際の日本を知ってもらふ必要がある。そのためには文化交流を盛んにしなければならない。そもそも公の場で日本語を使つてはいけないというのは心の鎖国ではないか。韓国側の対日文化規制を改めることが何よりも先決だと思わざるをえなかつた。

しかし、問題は韓国の側だけではない。日本側にも問題がある。自分も含めて日本人は韓国のことを知らなすぎる。特に近現代史についてあまりにも無知である。事実を客観的に見ようとししないで、ただ、戦前の日本は悪いことばかりしたという左翼の宣伝文句を鵜呑みにするだけの教育が行われてきた。このことは日本の歴史教育の大きな問題点だ。反日教育を受けた韓国人と歴史に無知な日本人とがいくら互いに交流を進めたとしても、健全な相互理解に結びつくとは思えない。韓国人も日本人も、どちらも偏見や思い込みに囚われることなく、きちんと過去の歴史を直視し、理解することが必要だ。だが、そのためには、まず自分が勉強しなければならぬ。こうした問題意識をもつて研修旅行から帰国し、日韓談話室の会合にも参加させていただくようになったことに心から感謝している。

その後、一九九九年に拓殖大学が創設百周年記念学生海外派遣事業として世界各地に学生を派遣した際には、私は自ら希望して韓国グループの団長を務め、二十名の学生を率いて韓国の大学を訪問することにした。この時は崔先生のお骨折りで、その前に日韓談話室の会合でもお目にかかつていた李東元先生のお世話になり、ソウルの国立墓地を訪問する機会にも恵まれた。左右に数十名の儀仗兵が直立不動の姿で並ぶ中を、正面奥の祭壇まで進み、二人の兵士が左右から抱える巨大な生花に私が手を添えて献花、そのあと団員一人ひとりが一輪ずつ献花、そして最後に私が焼香。さすがに緊張せざるをえなかつた。そのあと音楽演奏、黙祷と続き、記帳簿に署名してから、広い墓地内をバスで見学し、李承晩大統領と朴正熙大統領の墓に焼香して墓地をあとにしたのである。

あとになって、このような献花や焼香は特別のことで、通常は各国の大使級でなければできないということを知った。

された。このような光榮に浴することができたのは、崔先生と李東元先生のお陰であり、お二人にはお礼の申し上げようもない。もちろん学生たちにとっては一生忘れられない思い出となった。

このあと学生派遣団は、李東元先生の母上が創設した東元学園、さらに先生が理事長をつとめる東元大学も訪問し、そこで李東元先生の歓迎を受けた。そこでは一九六五年当時外務長官として世論の反対をおしきって日韓条約を締結した李東元先生の教育者としての姿に触れることができて、改めて深い感動を覚えた。そういえば拓殖大学の発展の基礎を築いた第三代学長の後藤新平は、日韓条約締結当時の椎名悦三郎外務大臣の伯父にあたる人物だが、その彼も人材育成にはことのほか力を注いだ教育者でもあった。

次の世代を担う子供たちの国際心を培ううえで、彼らと日常的に接する教員の果たす役割ほど重要なものはない。日本政府は、一九九八年の金大中大統領と小淵恵三首相との会談で「二十世紀に起こったことは二十世紀中に清算して、新しい決意で新しい世紀を迎える」との意思表示がなされたのを受けて、日韓両国間の相互理解と交流を深めるため、韓国人教員を日本へ招聘する事業と、日本人教員を韓国に派遣する事業を開始した。この事業は韓国側からも高く評価されることになり、のちに韓国政府が日本人教員を招聘するようにもなった。私もその招聘を受けて、二〇〇六年に二十名の日本人教員団の団長として韓国の学校を視察する機会に恵まれたが、こうした地道な交流を継続することが大事だと思う。

今日、日韓関係においては、政治外交レベルでは相変わらずいろいろな問題が存在する。他方、一般の市民レベルでは相互の交流が急速に深まっている。その点では、十五年前とは大違いである。特に若者たちは気軽に国境を越えて行動するし、お互いにすぐに仲良くなれる。こうした状況を見てみると、二十一世紀の持続可能な日韓関係を築き上げることは十分に可能だと思いたくなる。ただし、そのためには、両国の政治家たちがしっかりと大局を見据えて、それぞれの責任を果たさなければならぬ。

その際、歴史認識の問題をどう克服するかが大きな課題となるだろう。重要なことは、まず過去の歴史的事実を事

実として理解することであり、さらに、それを現在の価値観で評価あるいは批判したり、政治やイデオロギーによって歪めたりしてはならないということである。過去を忘れてもいけないし、過去に囚われてもいけない。未来志向で平和に共存できる社会を築き上げることが重要だ。

そのためにも両国間の交流はもつと増やす必要がある。交流を通じて、お互いの共通点を確認し合い、相違点を認め合う。それが異文化交流の基本姿勢でなければならぬ。ただし、親しくなると、つい違いを見失ってしまう危険性もある。「親しい仲にも礼儀あり」。互いの文化や伝統を尊重し、違いを認め合える態度を養うことが大切だ。

他方、相手に迎合するあまり、自分の国のことを必要以上に悪くいたりするのは禁物だ。そういう人は誰からも信頼されない。かつて崔先生が次のように言われたことがある。「自分は李承晩に追われて日本に来たが、我慢して韓国の悪口を言わなかったから今日がある。大山郁夫はアメリカに亡命しても東条英機や日本の悪口を言わなかった」と。先生のように、国際心と愛国心がバランスよく同居していることが何よりも重要だと思う。

その崔先生が「桂太郎が偉いのは学校をつくったから」と言われたことがあった。言うまでもないが、桂太郎は三度も総理大臣を務めた軍人政治家で、拓殖大学の創設者でもある。先の李東元先生にしても後藤新平にしてもそうだが、どんな分野であろうと第一級の優れた人物と言われる人には、同時に優れた教育者としての一面が備わっている。実際、日韓談話室で崔先生のお話を聴くたびに、そこに教育者ならではの行き届いた配慮が伝わってくるのを感じる。そのような先生に接することができたことは本当にありがたく、心から感謝している。

先生はどんなことについてもすぐに故事来歴を語れる博覧強記の人であり、その時その場の雰囲気に応じてもつともふさわしい話題を選び、もつともふさわしい日本語で表現する偉大なストーリーテラーである。そして何よりも、常に温かい心で人をもてなす人間関係の達人である。出会いから早や十五年、いつも先生のお話を伺えるのを無上の愉しみにして日韓談話室の会合に顔を出させていただいているが、この愉しみがこれからも一日でも長く続くことを心から切に願っている。